

ロールシャッハテスト濃淡反応記号の再検討

内 田 裕 之¹⁾

はじめに

ロールシャッハテストは、投影法の一つとして位置づけられているが、今日ではかつてほど華々しく研究・活用されているとはいいがたい。そうした中で近年、諸説をまとめるべく、統計的・実証的検討を目指して整理された Exner (1986) による包括的システム (いわゆる Exner 法) が日本でも紹介され、普及しつつある。

ところで、Exner (1986) が「実証的」と述べている点について見てみると、統計的な出現頻度を基に解釈仮説を検討したわけだが、これは、Rorschach (1921) 自身が述べた解釈的意義づけ (Symptomwert, 症候価) の考え方からすると片手落ちで、「原因論的」に、すなわち、何故そのようになるのかを考えると、いささか不十分さを感じてしまう。原因論的に症候価を扱った論考としては、例えば、Schachtel (1966) が挙げられよう。

ロールシャッハテストの症候価、解釈仮説については説明がまだまだ不十分な点が多い。その中で、本論では、濃淡反応の問題を取り上げる。濃淡反応の記号化をめぐる、諸説に決定的な相違が見られ、とりわけ統一の見解が持たれていない。ここで、簡単に諸説を紹介する中で、その一致点、相違点を浮き彫りにし、濃淡反応の心理学的意味づけの一寄与としたい。

I 濃淡反応記号の歴史的展開

1 Rorschach

濃淡反応の取り扱いの歴史的流れを見る中で、まず、このテストの創始者 Rorschach, H. の見解を見ておこう。彼は、その著『精神診断学』において、全く濃淡反応について触れていない。彼の死後、Oberholzer, E. によって刊行された論文では (Fb) という記号で、濃淡反応を取りあげていた。その後、同じくスイスの精神科医 Binder, H. により、濃淡反応は決定因の一つとし

て定着されていくことになる。

Rorschach が濃淡反応について触れているのは次のようなごく短い記述である。「それは多少とも情動の適応能力と関連するようであるが、しかし不安で、慎重で、自由のない性質の情動適応、他人の前での自己統制、およびわけても他人の前ではそれは統制しようする抑うつ的な基調気分傾向を示すように思われる」(Morgenthaler 編, 1923)。このように、創始者による明確な定義づけがなかったことに注目しておきたい。

なお、Beck (1976) は、Rorschach の (Fb) について、「遠近が強調されており、私のいう『通景反応』V に相当する。通景反応 V と拡散している灰色、私のいう『Y』との間の差異は、このロールシャッハの論文では未だ明確に区別されていない」と述べている。そうした、差異の不明確さを反映してか、Exner (1986) は (Fb) を Y に相当すると考えている。このように、諸家によって見解が異なってしまうのは注目すべき点である。これは、各人の理解不足に起因するというより、むしろ濃淡反応の明確化が困難であることの反映と見るべきであろう。こうして、後の研究者が、濃淡反応について、各人が独自の考え方を提示する、という今日の事情が生まれた、という見方もできよう。

2 Binder とその後の流れ

Binder は、健常者51名、精神病質者101名、神経症者58名、精神病患者61名のプロトコルの検討から、自身の分類枠を考案した。また、ただ単にそうした観察からだけでなく、感情に関する独自の仮説を持ち、自身の濃淡反応記号と関連づけて解釈仮説を提出している。しかし、残念ながら、今日あまり用いられていないのだが、濃淡反応を考えていく上で、重要な示唆を含んでいる。Binder は (Fb) と Hd という2つの記号を用いている (注: 広くアメリカで発展した体系に準拠していることから、'Hd' と聞くと人間部分反応内容を想起する向きが多いだろうが、ここでは独語 Helldunkel の略である)。この記号は、Bohm, Rapaport-Schafer, Schachtel,

1) 名古屋大学大学院研究生

Loosli-Usteriなどが採用していた。以下、Bohm (1960)の簡潔な紹介に則して論を進める。

このBinderの整理法は、後述するKlopferやBeckの整理法と大きく異なっている。確かに、彼らの整理法は濃淡がもたらす効果に基づいて成立しているが、それはBohmのいうように、Lds反応やAobjないしPelt反応という反応内容に依存しているという見方もできる。Binderもこうした分類が役立つとは考えているが、それらが濃淡反応の本質的で不変一定の面であるとは考えていない。

こうした本質的な面を論じる上で、Schachtel (1966)が参考になるだろう。彼は、幾分修正しているが、基本的にこの考え方を支持して、濃淡反応の検討において「陰影反応で生じる認知的特性」と「このような特性を生む、もしくはその認知によって強められる体験—認知的態度」に関する考察を強調している。

Binderの着目点はこうした認知的特性に基づくところが、大で、「多数の独立・分離した濃淡を強調した、多面的な反応」である(Fb)と「濃淡の持つ、拡散した全体的印象に基づく反応」であるHdに分類される。前者はBinderの感情に関する仮説では、中心的な感情に当たり、後者は辺縁的・反応的・不連続で一次的な感情に相当するという(彼の感情仮説について、ここでは触れない)。

(Fb)については、F(Fb)として一次形態反応という形を取り、稀な反応であるという。それは、一次形態反応として、まず一次的に個々の濃淡の識別的形態を強調し、濃淡刺激価が二次的に強調されるに過ぎない、としている。個々の濃淡は、客観的に明暗に差があり、濃い部分/薄い部分という具合に互いに明白な境界が存在している。それゆえ、二次形態の(Fb)F反応や純粹(Fb)反応は考えにくい。臨床像との対応として、特に精神病質や神経症ではF(Fb)は稀で、その理由として、彼らは感覚的で不連続な感情や情緒的適応能力の持つ細かいニュアンスにおける閾値が低いことによる、と考えている。さらに、F(Fb)は、Hd、M、Wと負の相関を持ち、D、Ddと正の相関がある、と述べている。しかしながら、ここでいう相関は統計的に相関係数を算出して得た知見ではなく、あくまで研究者の印象としてのことで、注意する必要がある。

3 Klopferの自我機能発達図式

次に、Klopferによる濃淡反応の整理法を紹介する。彼はロールシャッハ研究者としてだけでなく、ユング派の分析家としても活躍し、自我心理学の考え方をロールシャッハ解釈に導入し、診断と治療を融合させたとい

われている。解釈仮説として「自我機能発達図式」を提唱し、その中で濃淡反応を「基本的安全感」として人格発達の基盤に据えている。

河合(1969)の紹介によれば、基本的安全感とは「新生児が肉体は母親と分離しても、未だ母親の胎内に保護されているのと同じような、心理的な安全性を経験することである。(中略)このような基本的な安全感を求める新生児の欲求が満たされないときは、その自我が著しく歪んだものとなり、治療や矯正がほとんど不可能とっていい程のものになる」と定義されている。また「基本的安全感が不十分であると、自我防衛にたよることになり、自我の発達は歪んだものとなる。ここで、基本的安全感が適当に存在すると、それを母胎として、統合→分化→再統合の過程が生じ、自我はより高い統合性へと発展する」と、その重要性を論じている。このような母子一体感は、古くはFreudの大洋感情、Eriksonの口唇期の発達課題としての基本的信頼感、対象関係論の重視する母子関係、ユング派のグレートマザーコンステレーションのポジティブ面などの考え方や軌を一にしている。こうした理論が濃淡反応の取り扱いに反映していると考えられよう。

テスト学的には、濃淡反応を以下の3つの記号でとらえる。Klopfer, et al (1962)によれば、①表面または材質反応:Fc, cF, c, ②通景・奥行・拡散反応:FK, KF, K, ③二次元平面に投影された三次元効果:Fk, kF, kが設定されている。いま少し詳しく述べると、Fcは「確定的形体をもったものが、滑かさ、粗さ、柔かさ、堅さ、円みの感じなどの表面効果をもつものとして見られ、これらの性質が濃淡から引き出されたものであることがはっきりしている反応」と「不定形体のものではあるが、よく分化された材質効果をもつもの、すなわち、にしき織の生地など、たとえ外形は不定形体であるとしても、その材質効果自身がよく分化されているようなもの」と定義している。後述するが、二点目については、他の体系とスコアリングが大きく異なる。cFとcは「未分化な表面、または、材質記号」で形体との複合性の程度が異なる。FKは「全ての通景反応のための記号である。2個以上のもの間の距離が示唆されたときに、FKをつける。灰色の影の、濃い、淡いが、観察者の目からの距離の差を示す。そのときに想像された光の性質によって、淡いものが遠くに見えたり、濃いものが近くに見えたりする」とし、KFとKは「それを、分離さすことなく、ナイフをそれに刺し通すことができる」ような拡散反応で、「プロットの濃淡の質を、組織化されない、空間を満たしている拡散した物質、すなわち、霧、もや、煙のようなものを記述するために用いる」と

定義されている。最後の Fk, kF, k は「レントゲン写真」と「地勢図」に用いる。

以下に、具体的に解釈仮説とロールシャッハ反応として、テスト学的にどのように対応するのか紹介する。特に、Klopfer 法独自のロールシャッハ予後評定尺度 (Rorschach Prognostic Rating Scale, RPRS と略) での濃淡反応の評価軸を取りあげて濃淡反応の評価についてみていくことにしよう。

①暖かさ、柔らかさに言及した望ましい Fc 反応。以下、ネガティブな評価になっていく。②濃淡は分化しているが、外形があまり考慮されていない反応：この反応群は Klopfer 法では Fc と一次形態反応として扱うが、Beck 法ないし Exner 法では TF と二次形態反応になる。この点は次章で触れることにする。③固さ、冷たさに言及した Fc：これは「自我親和的」「自我異質的」という考え方から先述の望ましい Fc 反応と分けて考えられている。この区別・差異については、Harlow のアカゲザル実験における布製の代理母親と針金製のそれとを想起すれば理解しやすいだろう。せっかく濃淡認知が分化しているが、暖かさ・柔らかさという自我親和的感情ではなく、自我異質な感情として表明されるため、幾分ネガティブな評価となる。つまり、愛情欲求を受容するか、懐疑的に見るか、という解釈が成立する。④ Fc 否認：河合 (1969) は「否定」と訳しているが、「否認」とした方が適切と思われる。⑤色彩として使用された濃淡：color projection と呼ばれる反応。Exner 法では Y 記号で処理する。また、Klopfer 法を日本に紹介し、簡略化・改変した片口 (1987) は Cp という決定因を採用している。⑥ cF 反応や c 反応。⑦形態水準がマイナスの Fc。⑧ Fc 反応で、不健全な状態にある内臓反応：これは名大法の affect を用いれば Bdis (Bodily Pre-occupation, disease) と評定される反応で、内容分析的視点が加味されているといえよう。

次に K 属の反応を見ていくと、⑨ KF 反応および K 反応：free-floating anxiety を反映した反応と考えられている。⑩ FK 反応：不安を客観化し、距離をおいて見る能力。⑪ 形態水準がマイナスの FK 反応：上記の Fc マイナスと同様、外在の手がかりであるプロットとの適合性がなく、現実吟味を欠いた反応ゆえ、ネガティブに評価される。

一方、KF や K 反応から FK 反応へと望ましい発達を示さない k 属反応がある。ここでは Fk, kF, k という具合に、形態との複合性に関係なく評価される。なお、この反応群に特別な意味合いを与えているのは Klopfer 法独自の考え方である。Beck の流れをくむ体系では、拡散陰影反応 (Y 属) で処理し、「雲」「煙」

など (Klopfer の KF や K) と同列になる。

ここでは、せっかく三次元的・立体的な通景視へと成長する可能性をはらみながら二次元に押し込めてしまう体験様式になるという防衛的な意味合いがあり、いわば、自我を強くせず、自我防衛を強くして健全に自我が発達しない反応といえる。しかも愛情欲求に対する防衛ゆえに問題視される。また、この反応群の反応内容は「地図」「レントゲン写真」に限られ、その内容分析的視点から知的な防衛を試みていることの現われとして、RPRS では、ネガティブな評価がなされる。

一方、片口 (1960) の中で、k 記号については「弱立体」と名付け、「この分類は、特に独立させなくとも、他の陰影カテゴリーの中に吸収してしまえるのではないかと思われる」と述べ、その後、片口 (1987) において「k に対する反応内容カテゴリーは『地勢図』『レントゲン写真』など、ごく限られたものである」として、k を削除している。しかしながら、片口の訳語「弱立体」では“立体視が弱い”という意味になり、意味合いが異なってしまう。

ところで、村上・村上 (1988) が「不思議なことに片口法は多くの部分をクロッパー法に負っているにもかかわらず、クロッパーが定式化した解釈仮説のかかなりの部分を無視している」として記しているように、片口の著では一度も自我機能発達図式仮説について全く触れておらず、濃淡反応と基本的安全感との関連も考慮されていない。ここで、このような片口法の弱点も指摘しておきたい。

この他、一つの反応に与えるのではなく、プロトコル全体を通しての評価として、濃淡回避と濃淡感受性欠如がある。これらは濃淡反応が見られなかった場合に、どうして濃淡反応が産出されなかったのかを考えるためのもので、限界吟味での情報が生かされることになる。特に、この感受性の有無は、鑑別診断、病態水準を考える上で、重要な資料を提供してくれる。

限界吟味の技術的な問題になるが、例えば平凡反応として比較的産出されやすい VI-W 「毛皮」反応を用いて示唆を行なうことが多い。限界吟味では、その問いかけの方法ゆえ、どうしても示唆的になる。被験者の中には、検査そのものへの不安、成績・結果に関する不安、検査者がいるのだから正解であろうと感じて「見えるか」という問いかけに対して「はい」と答えるという場合もあるだろう。ここでは、感受性の有無という認知・体験的態度をみることが要求されるのであり、検査者の示唆を盲目的に肯定したからといって、感受性があると判断することはできない。あくまで感受性の有無に目を向けて質疑を行ない、感受性欠如なのか、Fc 否認なのか、

外縁・形態だけによるF反応なのか、を明確にする必要があり、それ故、検査者の技量が問われることになる。

なお、ネガティブな評価、特に防衛が強く働いてエネルギーが円滑に流れていないことが認められても、河合(1969)が「一応濃淡を認知する潜在力をもっている点は、このような防衛の裏に、自我の発展する可能性が秘められていることが感じられる」と述べているように、決してネガティブ面にだけ目を配り、烙印を押すようなことに終始してはならないことを付記しておきたい。

4 Beck から Exner へ

Beck (1961) は、かなり Rorschach (1921) の原法に忠実に自身の体系を構成した。例えば、形態水準評定については、Rorschach (1921) の記述に忠実に出現頻度に基づいてリストを作成していること、運動反応について人間運動反応しか認めていないことが挙げられる。その中で、濃淡反応については、独自の整理法を提唱した。この整理法は、後に構成された体系に大きな影響を与えた(例えば、阪大法、名大法、Exner 法)。

彼も、濃淡反応の整理については3つの記号を用いている。それは、材質反応:T (texture)、通景反応:V (vista)、拡散(灰色)反応:Y (gray) の3つである。Beck (1976) によれば、彼は Rorschach, Binder, Klopfer の影響を受けたという。記号をそれぞれ見ていくと、Y 記号が「核となる陰影反応」で「拡散的な灰色であり、陰影の濃淡の度合いは問題にしない」と定義し、黒色反応(Klopfer の C' 属)を含んでいる。また、その意味は臨床像により異なるし、同一の臨床群内でも、程度による個人差がある、と考えている。つまり「抑うつ者においては、それは諦観であり、連想には黒色の影響、Y がより強調され、形態Fの影響がより少ないほど、いっそう強烈に体験される。神経症者においては、灰色は不安による重圧を受けて、感情的に受け身になっていることを物語っている。脳器質障害者においては、それは無感情 apathy を示す。分裂病者にみられれば、それは、極端な解体、運命や環境に直面しての現実からのひきこもりを示す。分裂病者を含め、あらゆる臨床像における Y の意味の規定には不安が存在する」と説明している。

V 記号については、Adler, A の劣等感に関する考え方を援用している。Beck (1976) は、通景反応の例として以下の4つの主題を挙げている。「(1) 遠景、あるいはけわしい風景、高い山を含む。(2) 建造物。これは、内的な不全感という意味合いをいっそう探求する必要がある。(3) 孤立した風景。通常、水によって囲まれた島だが、陸によって囲まれた水の時もあり、孤独感から生

じている。(4) 反射。この意味はまだ十分に明らかにされていない。私は、仮にこれを、かなわないことではあろうが、自分を評価して欲しいとの痛ましい欲求と解釈している」と説明している。

最後の T 記号については、Klopfer の c 記号及びその解釈仮説を参考にして、Beck (1976) は「材質反応は子供または成人のうちに存続している幼児期からの残存物、すなわち愛情飢餓をあらわにするというかなり大胆な仮説をたてた。それは患者が、性愛的な接触の欠如を感じていることを示しているが、これは幼児にとって極めて重要なものであって、この接触を拒否されることは、幼児の人格をむしばむ傷あとを残す。ロールシャッハ・テストに T 反応を示す人々の中には、その人々の実際の生活史からは、剥奪体験を体験したことが実証されるかもしれない。その人の母親は、適切な温かさや愛情をすべてそそいでいたかもしれない。しかし何かの理由によって—この理由が正当化されようとされまいと—この人は、自分がもっていないと感じている愛情的な接触を常に渴望している。これは、重い神経症的な症状である」と説明している。

Exner (1986) は包括的システムを構成する上で、Beck の記号を採用し、幾つか改変を行なった。それは、① Klopfer の考え方を援用して拡散反応から無彩色反応を分離した。② 通景反応 V 記号をめぐって、濃淡に基づかない反応として FD を設定し、濃淡に基づく通景反応から分離した。③ 反射反応に Fr, rF という記号を設け、通景反応から分離した、という点である。

FD について、Exner (1986) は、濃淡に基づかず、大きさの区別や他の領域との位置関係による、形態だけに基づく遠近や立体性を伴う反応と定義し、その解釈について Exner (1991) で、FD は過度に生じていない限りは、一般的に良いサインであるとし、V 反応は自己検閲によって何らかの情緒的な苛立ちが経験されていることを示すとしている。このような遠近法・大小関係・位置関係に基づく通景視と濃淡・グラデーションに基づく立体視とを比較した場合、当然後者の方がよりセンシティブであることが想定される。こうした感受性を、繊細さとしてポジティブに評価するか、その繊細さが仇となって心理的葛藤を味わうことになるとしてネガティブに評価するのか、という判断をする際に、出現頻度に基づく統計的検討は確かに重要な資料を提供しているといえるが、それだけで簡単に結論を出せない問題を含んでいると思われる。

また、反射反応については、反射であることからその反応概念は形態性を伴っていることになるので、Fr, rF の二つだけで、無形態・非形態の pure r 記号は設

けていない。このように厳密な意味で濃淡反応から分離したことは卓見といえるだろう。この反応は濃淡に基づくというよりプロットの対称性に基づくと考えられる。なお、反射反応は慣例的に精神分析理論を援用した内容分析的視点から、ナルシズム反応と考えられており、例えば、名大法の感情カテゴリーでは Pnar (positive feeling, body narcissistic) とスコアされ、「自己中心的に方向づけられた対象カセクシス。外界の対象との関係での不完全な発達」と解釈される。これに対して、Exner (1986) は同性愛、反社会的な群に見られたという知見から、自己中心性の指標としている。

II 記号化における不一致について

材質反応において、Klopper 法の Fc と Beck 法および Exner 法の FT は必ずしも対応しない。Exner (1966) は、Beck 法と Klopper 法を対比させる記述を行なっている。その中で、純粹材質反応における相違について、c 反応は「ベックの T ににているが同じではない。完全に形態を無視し、C におけるようにどちらかという機械的に反応する。クロッパーはこれもまれな反応と考え、重症の病理的症例にのみ見いだしている」としている。また、cF については「こうした反応の多くはベックの場合は T とする」と述べ、Fc については「ベックの FT に似ているが、形の明確性をそれほど要求しないので、ある反応はベックでは TF となることがある」と比較している。

こうした相違は、濃淡が分化しているかどうかに着目しているためで、濃淡が分化して用いられているが、外形があまり考慮されていない反応の場合に、一次形態とするか二次形態とするかという見解の相違が生じることになる。つまり、どこまでを一次形態として、どこからを二次形態にするか、という形態との複合性の問題である。Klopper は Beck や Exner なら明らかに TF とする反応を Fc とスコアしている。Klopper (1954) は「cF は未分化な概念に対して用いられるのであって、感じの強さの程度を示すものではない」と明示しており、反応における印象の強さだけでは安易にスコアしないことがわかる。この点については、Klopper 法独自の形態水準評定が関連しているだろう。このような二次形態反応は印象によって生じるのではなく、形態水準 0.5 水準の半確定的形態概念を与えた場合に二次形態反応になると考えるのである。また、そもそも、Klopper 法では、C 反応と同様にスコアされにくい。参考までに、無形態・非形態 C 反応を「純粹色彩反応 (pure C)」ではなく「未熟な色彩反応 (crude C)」と呼んでいることからわかるように、形態との複合能力が全く見られ

ない場合、極めてネガティブな評価を行なう。

また、Exner 法では解釈において、材質反応の個数をまず第一に考えていて、形態との複合性、一次形態であるか二次形態であるかはここでの解釈に直接反映していない。一方、Klopper の場合、二次形態材質反応と無形態・非形態材質反応 (形態水準が 0.5 ないし 0.0 水準) は、病的なサインとして厳密に区別している点は注目すべきであろう。このように、材質反応をめぐるのは、量だけでなく、質の問題も同時に取り扱うべきだと筆者は考える。この点で、Exner が材質反応を量的に扱うにしても、 ΣC における重み付けをするような工夫があるのかもしれない。現状では、この問題について、筆者は決定的な見解を持つにはいたっていないので、ここでは、量と質の問題を取り上げるべきだという指摘にとどめておきたい。

通景反応においても、相違点が見られる。Beck の記号に慣れている人からすれば、Klopper 法の FK, KF, K を翻訳すると、FV, YF, Y となり、連続性がないこと、VF や V といった二次形態、無形態反応が存在しないことに目が行くだろう。このような不一致は、先の Beck の引用に見るように、Y と V の差異の不明確さの現われかもしれない。この点、辻・林 (1960) は「Klopper のいうように、Vista は大多数が形体優位であることを認めるにしても、すべての Vista を FK で表現しようとするのは、すこし疑問が残る」と述べている。しかし、Klopper の記号は、二次形態の通景反応をうまく取り上げることが出来ないが、自我機能発達図式という解釈仮説からすれば、理に適っているといえる。

また、FK と FV とでは解釈の意味が全く異なってしまう。反応産出における外在の手がかりであるプロットの微妙なニュアンスである濃淡刺激を読みとり、それを反応に織り込んで言語化できるということをポジティブに評価するのか、ネガティブに評価するのかはきわめて難しい問題である。Klopper が FK をポジティブに評価している一因として、母子一体感という融合的な基本的安全感と対象の間に距離をもてることを対比させていることが挙げられる。つまり、ロールシャッハテスト課題における意味づけだけでなく、自我心理学的な解釈仮説を援用しているため、ポジティブな評価をしているといってもよいかもしれない。

最後に、注目しておきたい点として、積極的に材質や通景や拡散といったニュアンスの読み取れない、単なるプロットの濃い部分と淡い部分から成立したような反応を一応考えておく必要があるだろう。例えば、IV-W 「象の顔」、V-W 「片目をつぶった人」、II-上部赤色 D 「人の顔」などを時折見かける。

岡部・菊池(1993)は、「顔などの部分を明細化するのに、濃淡をうまく分化して利用している場合は、凹凸感に言及しなくてもFcとする。しかし、濃淡の差がはっきりしている場合は、Fcとはしない」と解説している。

一方、この種の反応をYで処理することも考えられるだろう。それは、元々YがC'を含んでいたように、この2つの微妙な差に位置するような印象があるからである。しかし、高橋・西尾(1994)は、例えばVI-W「楽器、この濃いところが弦」という反応では濃淡反応(彼らの解説しているExner法では、FY)とスコアしない、と述べている。その理由として、対象の特徴というよりも、対象の領域を示していることを挙げている。

濃淡反応の核として、Klopper法ではc記号、Exner法ではY記号を置いているが、その両体系の考え方の相違が浮き彫りにされる。この種の微妙なニュアンスの濃淡反応をSchachtel(1966)の「私の感じでは、或る表面組織反応の場合は、想像された接触感覚が或る役割を演じているだろうが、それがすべての陰影反応に当てはまるとは思えないし、あらゆる陰影反応が愛情欲求と直接関係している、というクロッパーの見方にも賛同し兼ねる」という指摘に従えば、材質反応と同列に扱うのは疑問であるが、Y記号で処理するのも同様に疑問である。その理由として、拡散Y記号はBinderのHdに一致するはずだが、これらの反応の場合は不連続な濃淡をしようとした識別的知覚がある点で、むしろF(Fb)に近いと考えられるからである。この点で、既存のcやYではなく、別の記号を与えるべきだと思われる。

筆者は、このような濃淡の言及を「ロケーションを示すための濃淡言及」と呼びたい。これは、有彩色図版に対して「赤いところが花」式の説明に通じると考えられる(この場合「ロケーションを示すための色彩言及」と呼ぶ)。そう考えるならば、決定因に濃淡を含んでいないといえる。

しかしながら、色彩の場合は、実際に図版の特性として客観的に存在しており、色盲などの問題がない限り、色彩を認知する能力を考える必要はない。だが、濃淡の場合、確かにプロットの特性として存在しているが、ある程度積極的に見なければ見えないものである。つまり、ロケーションを示すためであれ、濃淡を認知したということがうかがえ、濃淡を決定因に含めること、つまり濃淡反応とすることは出来なくても、濃淡感受性があると考えられるだろう。

但し、Wで「顔」反応があった時に、「顔だとするとこの辺りが目になる」と説明する場合がある。図版によっては「位置的にこの辺りを目にする」と辻褃が合う」という具合に、植元(1964)の思考言語カテゴリーでい

うところの、arbitraryな説明と区別する必要があるだろう。この点の区別は、プロットの刺激価の研究による客観的な資料が必要で、また、評定を行なう検査者自身の濃淡感受性とも関連してくるようになり、難しい問題をはらんでいるのかもしれない。

まとめに代えて

序でも触れたように、研究法の問題を繰り返し強調してまとめに代える。今後Exnerよろしくnomotheticな検討を行なう一方で、idiographicな検討を行なう必要があることを痛感している。残念なことに、ロールシャッハテストを用いて研究した場合、形式数量分析ないしサインアプローチ即nomotheticな研究、内容分析イコールidiographicな研究という硬直した理解があるように感じている。筆者は、Rorschachおよび辻が強調する形式構造分析的視点からこのテストを用いている。この視点からidiographicな研究を行なうことは可能であるし、またそれを行なっていく必要性を感じている。今回取り上げた濃淡反応の研究は、安易な内容分析とは無縁な、形式構造分析が有効な領域といえる。今後、出現頻度の低い濃淡反応について、ノンパラメトリックなアプローチを取ったnomotheticな研究、および形式構造分析的な症例検討を行なったidiographicな研究を積み上げていくことを望みたい。沈滞しつつあるこのテストの研究および臨床場面での利用・活性化を切に願って筆をおきたい。

文 献

- Beck, S. J., Beck, A. G., Levitt, E. E. & Molish, H. B. 1961 Rorschach's Test. I : Basic Process (2nd ed.). Grune & Stratton.
- Beck, S. J. 1976 The Rorschach Test: Emplified in Classics of Drama and Fiction. Stratton Intercontinental Medical Book Corp.. 秋谷たつ子・柳朋子訳 1984 ロールシャッハ・テスト: 古典文学の人物像診断. みすず書房.
- Bohm, E. 1960 The Binder Chiaroscuro System and its Theoretical Basis. Rickers-Ovsiankina, M. (ed.) Rorschach Psychology. John Wiley & Sons, Inc.
- Exner, J. E. 1966 A Workbook in the Rorschach Technique: Emphasizing the Beck & Klopper System. C. C. Thomas. 梅津耕作訳編 1969 ロールシャッハの基本的採点法: ベック方式とクロッ

- パー方式. 日本文化科学社.
- Exner, J. E. 1986 *The Rorschach: A Comprehensive System Vol. 1, Basic Foundation* (2nd ed.). John Wiley & Sons. 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 1991 現代ロールシャッハ体系(上). 金剛出版.
- Exner, J. E. 1991 *The Rorschach: A Comprehensive System Vol. 2, Interpretation* (2nd ed.). *Rorschach Workshops*. 藤岡淳子・中村紀子・佐藤豊・寺村堅志訳 1994 エクスナー法ロールシャッハ解釈の基礎. 岩崎学術出版社.
- 片口安史 1960 心理診断法詳説: ロールシャッハ・テスト. 牧書店.
- 片口安史 1987 改訂・新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.
- 河合隼雄 1969 臨床場面におけるロールシャッハ法. 岩崎学術出版社.
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G. & Holt, R. R. 1954 *Developments in the Rorschach Technique Vol. I*. World Book.
- Klopfer, B. & Davidson, H. H. 1962 *The Rorschach Technique: An Introductory Manual*. Harcourt, Brace & World Inc. 河合隼雄訳 1964 ロールシャッハ・テクニック入門. ダイアモンド社.
- 名古屋ロールシャッハ研究会編 1990 ロールシャッハ法解説: 名古屋大学式技法(1990年増補版).
- 村上宣寛・村上千恵子 1988 などときロールシャッハ: ロールシャッハ・システムの案内と展望. 学芸図書.
- 岡部祥平・菊池道子 1993 ロールシャッハ・テストQ & A. 星和書店.
- Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungs Diagnostischen Experiments*. Ernst Bicher. 片口安史訳 1976 精神診断学: 知覚診断的実験の方法と結果(改訳版). 金子書房.
- Rorschach, H. (Herausgegeben von Morgenthaler, W.) 1923 *Zur Auswertung des Formdeutversuchs für die Psychoanalyse*. (Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungs Diagnostischen Experiments. (9. unveränderte Auflage). Hans Huber, 1962年に再録)
- Schachtel, E. G. 1966 *Experiential Foundation of Rorschach's Test*. Basic Books. 空井健三・上芝功博訳 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房.
- 高橋雅春・西川博行 1994 包括的システムによるロールシャッハ・テスト入門: 基礎編. サイエンス社.
- 辻 悟・林 正延 1960 著るしく Vista 反応を示した一症例. ロールシャッハ研究Ⅲ.
- 辻 悟 1987 ロールシャッハと私の精神医学. 辻悟・河合隼雄・藤岡喜愛・氏原寛編著 1987 これからのロールシャッハ: 臨床実践の歴史と展望. 創元社.
- 植元行男 1964 ロールシャッハ・テストを媒介として, 思考, 言語表現, 反応態度をとらえる分析枠の考案とその精神病理研究上の意義. 名古屋医学87 (1). (ロールシャッハ研究XV・XVI, 1974年に再録)

(1995年9月13日 受稿)

ABSTRACT

A Review on the Shading Responses of the Rorschach Test

Hiroyuki UCHIDA

In this study, the scoring of the shading responses in the Rorschach Test and the 'Symptomwert' i.e. psychological importance of them are discussed. Especially the methods of Binder, Klopfer and Exner are focused.

In the process of producing shading responses, the two elements are connected too complicatedly to be put in order. The two elements are (a) blot characteristics, (b) shading sensitivity, e.g. (i) texture/warmth/tactile impression, (ii) feeling of three dimension, (iii) vagueness or diffusion which reflects free-floating anxiety.

After this review, an adequate scoring system of the shading responses must be built. And using such scores, further discussions are hoped through both nomothetic researches and idiographic case studies from a point of view of Hermann RORSCHACH's 'das Formale'.

key words : Rorschach Test, shading responses, scoring system, shading sensibility, blot characteristics